4285

特67
409

梅園薫羅筆記
亀井蜻洲復文

十九年九月九日内務省交付 460

新歌舞伎十八番の内

桃山譚 全

一名演劇傍聽筆記

074841-000-8

特67-409

新歌舞伎十八番の内桃山譚

亀井　蜻洲／編

M19
CEK-0190

特67
409

自序

[illegible]

新歌舞伎十八番の内　桃山譚

桃園蘇羅筆記
龜井蜻洲復文

● 初幕

破風の作りの玄關も、地震の爲に打壊れ、白壁腰板破れて、共に蛇の目紋散し、柱は倒れ椽れ墜ち、夜詰四人の侍士も、搖られた、まれ、疊をば漸く持ちつゝ、立上る折から又もドロ〳〵〳〵

待士四人「萬歳樂〳〵

四人急度に疊をば放り出して打倒れ暫くありて動搖の少しく靜かになりければ、

○何と諸士稀しからぬ地震では御座らぬゥ遽かに家を搖動かし未た
に止ぬアノ震動

×「誠とに前代未聞の事年代記で見るのみにて眼前出逢ふゝ今が始め
て
△「御殿ゝ別條御座らぬが壁を殘らず振ひ落し御座敷内ゐ山が出來往
來も成らぬ仕儀
□「一度ゐふゞ兩三度斯震はれてゝ命ちが溜ふぬ何でも押ゑ打をぬ樣
庭へ出るに如くゝない
○「さ此上に何の樣ゐ搖り返しが來やふも知れぬ必ず油斷ゝ出來ま
せぬぞ
×「何でも物の倒をぬ所へ壁を數て鎮まる迄慎しで居よ仕方がゐい
△「御前を始じ先御近習衆何れへ參りて御座るやふ
□「併し我君御信心の法花經れ功力でも當家ゐ輕俄ゝ御座るまい
○「斯る變れ有る知ふせゝ今雷ゝ雷より空色惡く子刻過より一天赤く

殊にゝ井戸の水溢れ
□「唯事ならずと打集り衆評ゝ致せしが天文博士に非ざれば
△「大地震とゝ夢さふ知らず狼敗騒ぐ我々共
□「アレ〳〵又もや家鳴り震動致せゝ搖り返しが參ると見える諸氏も
油斷仕召さるな
○×△三人「心得て御座る　四人「萬歳樂〳〵
グラ〳〵崩るゝ烈し地震動ゐ、四人の者ゝ打倒れ折しも向ふの方より
しで小手脚當に身を堅め鎧下に太刀を附け鐵の棒をゝ携ひて四人の若
武者出來る　飯田「アレ見られよ方々御玄關から御殿を掛け、先づ別條ゝ
非ざれど　齋藤「主君ゝ何れに御座るか御身の上心元なし　小關「若や
御殿に變あふば命限り腕限り　堀本「倒れし家も鉄棒にて刎起しで物則
け申さん　飯「斤時も早く諸氏も御座れ（ト駆來り倒れし己前の待士呼び）

齊「コレ〳〵何れも御主君ハ別條御座らぬか　飯、齊、小堀、四人の武者「如何や御座る〳〵　待士四人「萬歳樂〳〵〳〵　小「コレ〳〵最早地震ハ鎮まり　堀「心を慥かお持つしやれト搖り起せば　○「是ハ〳〵　飯田氏を始め各々方　□「何れも方にハお輕俄ハ無か　飯「イヤ我々ハ兎も角も主君ハ如何召れしや　△「斯る騒動の中なれば　□「御主君の御樣子ハ　待士四人「一向に存じませぬ　齊「云甲斐なき人々かな　小「イデ此上ハ御寐所へ罷り越し　堀「君の御先途　四人「見屆ケ申さん（ト中にハ入らんとする折から後ろに響く大音聲）　正「清イヤ氣遣ひ致すな別條ないろ　飯「ヤ、あのお聲ハ　皆々「正敷御主君　正「唯今ろれへ參るで有ふ（ト正清が破風の格子を打破り鎧直垂小手脚當身輕に出立右小差を、口に噛へて太刀鎧小脇に抱へて出來り家根の上にと座を構ふ）　小「コリヤ御主君にハ　堀「御安眠にて　皆々「在しませしか、清正威儀を正して曰ふ樣「雷鳴地震ハ天地の不思議陰陽逆する氣に依て天に聽き地を動そと古老の咄しに聞及ぶ寶德文正の大地震も斯やと思ふ今爲の天變主君の御身氣遣ハしく挑山御殿へ出仕おさんと思ふ折柄其方共にハ能くも驅付參りしや　飯「ハッ唯今物見の築山より東西南北見渡せしに　齊「月まだ殘る眞夜中あれど地中を震へし土煙り　小「月を覆ふに闇夜の如く更に黑白も分らざりしが　堀「所々の篝火に能く見れハ東寺清水八坂の塔　飯「家の棟高き神社佛閣市中も餘程破損の樣子　正「ム、偖也邊りの神社佛閣震災故に破損せしか氣遣ハしきハ桃山御殿ろれト自ら家の棟へ飛び上りつゝ邊りを見廻し　正「壹にも勝る所々の火の手に遙かに望む桃山の築地も倒れ營中ハ悉々く破損の有樣愈々以て我君の御身の上危うし〳〵今御不審の蒙つて御目通りを遠さけられ謹慎の身の正清あれど是より直に御殿へ立越へ君の御安否伺ハんト云つゝ家根より飛下る　飯「スリヤ御主君

にハ　四人「桃山御殿へ　正「チヽ誰かある奥へ参り大政所より拜領の蛭巻の長刀持参致せ　○□兩人「畏まつて御座りまするト二人ハ奥へと立て行く　正「マッタ小堀本ハ齊藤常本を始めとし小具足に身を堅め鉄鉢を持参なを様長屋々々へ供觸致せ　小堀、二人「畏まつて御座りまをるト下手の方へ急ぎ行く　正「寸の間も心が急くソレ身仕度致さんト正清ハ手早く鎧に身を堅む　飯田「スリヤ我君にハ鎧にて　齊「御前へ御出仕二人「被成まするか　正「チヽ君の御身氣遣し其方達も供致せ　二人「ハヽ御供致そて御座りまをる、此時下手よ聲あつて　莊「アイヤ其御登城暫らく　志「御止まり下さりませト上下着せし二人の武士大小たばさみ出て來る　正「ヤア誰かと思へバ我愛臣莊林隼人志村又藏　飯田「何故君の御出仕を　齊「御兩所にハ　飯外二人「お止め有しぞ　莊「お止め申そハ　志、「お爲故　正「何と　莊「武者の小路ハ云に及ばず桃山御殿ハ破損せし故大

領の御身氣遣ハしく是より御殿へ御出仕あるハ御尤に御座れど此度君の御不審蒙り御目通り禁じられしも正しく石田尾西が佞辯を以て讒言せし故　志「未だ御赦免なき中に押て御出仕ある時ハ又もや彼等が姦計にて如何なる御咎め蒙ふらんも計り難き此時節桃山御殿へ御出仕の義ハお止り遊バしをそるハ然る可しと　莊、志、二人「存じまする、正清鎧を附ら　正「其方共が止むるも實尤ともの事乍ら平日事變聞も及ばぬ大地震君の御身心元なく譬へ御不審の筋有て御勘氣蒙ふる身の上ハもせよ出仕あして御安否を伺かハねバ不忠の至り押て是より出張あせバ其方共も供致せ　莊「誠と忠心無二の御主君故左程迄に思召そハ誠の道ハ御座りまそれど佞人讒者の曼こる世の中　志「今雷押ての御出仕ハ下世話に申す石を抱ひて淵に臨む譬への如く如何ある落度に成んも知ず　莊「御出仕の儀ハ遮斷で　志「我々兩人お止め申す　正「譬へ何様止むる共押

て出仕致さねば心濟ぬゝ幼年より君の御側で人と成り大恩受し此正清登城爲して御安否と伺がゝねば心が濟ぬ　莊「デハ御座りさしやうが御出仕あらぞ御勘氣の身を以て推參あそゝ大頓を蔑視に致す抔と　志「佞人讒者の舌頭に罪に罪を重ぬる道理平にお止さり被下さしやう　正「イヤ〳〵正清思ひ止さらぬ是非とも出仕致さにや成ぬ　莊、志、兩人「其所を何と　正「未々申さか扣へ居ふト咤叱れゝ兩人ゝ「ハット平伏す　正「御勘氣の身の上を省顧ず推參爲せしが落度と成てさだ此上に罪を重ね一命を召るゝなら武門を守りの弓矢神正八幡ゝ云ふに及ざす我日本ゝ神ゝ國あるに助くる神の無き道理神明誠とを照し賜へば何條此身にお咎め有んマッタ誠とを照さずば此儘蟄して居たり共五ケ年此方朝鮮にて千辛萬苦も水の泡に切腹仰せ附られん兎にも角にも正清が一命賭ての今雪の出仕必ず共に止むるおト嗜ひれば二人ゝ又も平伏す　飯「斯迄忠義の思召神明納受さしさぞよもお咎めの御座るさい　齊「御兩所にも仕度召れて君の御供致されよ　莊「ハッ斯迄深き思召を不省ず御諫言を申せしゝ　志「恐れ入たる身の誤見イザ此上ゝ一命賭お供致すぞ　兩人「御座りさるる　正「然らば汝等ゝ服を改め桃山御殿へ跡より續け　兩人「畏まつて御座りさるる　正「早く致せ　兩人「ハット志村並びに莊林衣服を替にと入る跡に侍士(○×)二人ゝ長刀と陣羽織をゝ持來る正清手早之を着る折から小闘堀本駆來る　小「仰せの如く常本始め各自身輕に出立て　堀「隊伍亂さず列を正し表御門へ扣へ居りさそ　正「用意宜くば是より直に桃山御殿へ推參あさん　飯「併し道路ゝ市中の者共　齊「恐怖おして立騒げば　小「但ゝ道の桃山迄も　堀「容易に往來なり難し　正「譬へ家の棟折重り道の妨げあそ迄も君を思ふ忠義の一心　飯「然らば是より

（正「それト正清先に駆け出す折しも又も猶り返し）　齊「アレ〳〵又も

皆々「揺り返し」正「何程ときに」ト長刀小脇に持替て　正「者共慎け」皆々「ア、、、跡に附添入にけり

●二幕目

此所い伏見の城中にて茲も先の大地震揺られ荒たる奥庭に見るも爛々金屏風左右い白地に桐の紋附さる幕を張廻し所々に高張立連ね中にい闕白久吉公白の着附に小忌衣高麗縁の疊を三疊重ね褥を敷き小性に太刀を持せつ、威儀と正しく坐と構ふ席に連なる政所淀君始め幸藏主六人の局従へて地震と避る仮の御座床の浄瑠理

「行空の須臾時めく桃山御殿御庭先へ久吉公震災除る御駕輿皆々守護なし奉る

幸藏主「偖も〳〵凄ましい大地震で御座りましたなア　政所再び三度の揺り返へしに心も心ならざりしが　淀君「漸々少し鎮まりて人心地になりましたはいナア　久吉「今朝天文博士より天變あるとの訴へ乍ら一つ天に雲なき快晴故合點行ずと思ふ中暴風吹て班雲立ち夜に入て赤氣を帯むい博士の敬ひ奉るりと環て覺悟い致せしが存じの外なる此地震嘸政所始め女房達驚怖せし事で有ふ　政「御意の我腹を始め俄かに家鳴震動おし御殿も一時に崩るゝ計り揺り動きしに打驚き　淀「お庭へ出よと我君のお聲を力お辭々と夢路をたどる思ひにて手に手を取て廣庭へ逃延ましして御座りまそる　局○「通りし跡にて塗が落ち又い隔ての築地が倒れ　局□「危うひ難を免れて我君様を始めとして　局△「政所様淀様にも此所へお立退　局▲「何れも様お輕俄の無いい　局●「日頃信心なし奉つる　局〈「神や佛の御加護にて　○「かく安躰にはしまそい　○□△▲

●昔々「お目出度存じまする　久「サヽ多人数の者故死亡の者も有かは知れど差当り此席へ連なる者に怪我無は予に於て満足なるぞ　幸「是と申そも我君様今昔稀なる御武運に強なりませぬ私共迄其御余光で怪我も無ふ逃延まして御座りまそる　久「是も假かの天変ふ何れへ参つて居るやら　政「内ふいせし者とてはお側に従ふ小性のみ　淀「女中計りで我君の御守護為れ心元なし　幸「今は太平とは申し乍ら斯る折には油断ならず　政「誰ぞ出仕致せバ宜いよ　久「未だ誰も出仕せぬか　幸「五本行列始めとして諸役人共誰登入御出仕は御座りませぬ　政「斯る折には誰よりか力量勝れし正清がお側に居たるならば心丈夫で宜らふ者君の御不興さふりて朝鮮国より帰りてより御目見得叶わぬ勘気の身の上　淀「如何なる訳の有かは知らねど一方ならぬ御家来故其御咎めをお免し有て以前の通り御家来とおし遊ばしましやうならお嬉しう存じまする　幸「政所様淀様のお詞に附まして御訴訟申し上ますれ天下無双の英雄も君の御勘気蒙りて久しく〳〵蟄居なし明暮御免有様にと此字の旗を床へ掛置武をも打忘れ日に数千遍の題目唱へ見るも哀れなる有様を髭宗となく人の噂御主殿にも御座りましやうが未虎之助の時分より御傍に仕へし正清様何卒御免被下ますやう　○「猶なりませぬ私共迄正清殿の御勘気御免□「偏へにお願ひ　皆々「申上まする　久「政所始めとし幸蔵主が詫言並べ精して逸度者なれど我名代に遣れせし尾西行長をさゝおすゝみか免しも無ふ朝鮮国の地を名乗りし不届奴此儀に宥し難は小西上りの正清故免し偏端の沙汰とや云ん人心に係れれば此度計りは宥されぬ　政「スリヤ何様お詫なしでも　淀「主計頭が御勘気は　幸「お免し御座りませぬか　久「ヤヽ近々に彼を呼出し不敬の罪を糺し申聞無に於ては切腹申し附る所存じや　皆々「ヘヽー　久「今日迄猶予なすは幼年より側近ふ召仕へし

正清故此久吉が情けとや彼が事い重ねて申すな御當れ死さぬぞ　幸「アヽ是非も無義や　皆々「御座りやすわいナア

浄瑠璃

「せんかとなき折から又も烈しき揺退し

局○「又もや地獄の揺り返し　幸「何れも君を御識召れ　皆々「畏りやし

た

浄瑠璃

「君位守護なす女中方時しを受へ佐藤正清手の者引

連駆來て

又も烈しき揺り返し佐藤正清もの乗せず志村又藏班林飯田喜藤堀内

小藤鍾下に身を堅め各自餘棒捕さ名て此所へと駆來る　正「幸藏主い在

さぬか幸藏主く

浄瑠璃

「大音聲に呼ハれば何人なるふと幸藏主幕位のゝけ

て此方へ立出

幸「我聞を呼い何人なるぞ　正「肥後の國熊本の城主佐藤主計頭正清で御

座る　幸「何正清殿とナ

○浄瑠璃

「驚ろき仨ら側へ寄り

幸「ナヽ正清殿傷ん久しう逢ませあんたが先い御堅勝よ御寄りせしと

正「幸藏主にもお替りなく　幸「お悦こび申しまするヽ地獄で佛と嬉しが

る

浄瑠璃

「云つヽ顔位打守り

幸「アヽ五年此方朝鮮にていかひ御苦勞被成しやら替らぬと申せども以前に替る正清殿思いす泪が出ますわいのゥ　正「幼少よりの馴染とて忝けあき北お詞種々申し度義も御座れど夫い偖置今宵の地震君にい御安躰に御座りまするか　幸「お案じ被成まする御安躰に御座りまする　正「夫れい何より忝けあいト家來の者共に打向ひ「者共慥べ御無事あるぞ

莊「大慶至極に　皆々「存じ奉つりまする　正「シテ〳〵何れに御座あるぞ

幸「御もち彼みるお幕の内に君と始め政所様淀様もお立退で御座りまする　正「スリヤ彼なるお幕の内へお立退被成しとかシテ登城致せし者共い　幸「五本行始め來だ誰も登城あきに流石い忠義の正清殿能も早く御出仕被成ましたお手柄お事で御座りまする　正「スリヤ石田光成も來だ登城致さぬとか某し御勘氣蒙ふりて謹慎の身の上乍ら前代未聞の大地震君の御身氣遣いしく若御寐所の崩れなば引退さん其爲に彼見られよ家來共に鉄の棒を持參させ召連て參つたり御前宜なに御執成其元よりお頼み申す

浄瑠璃

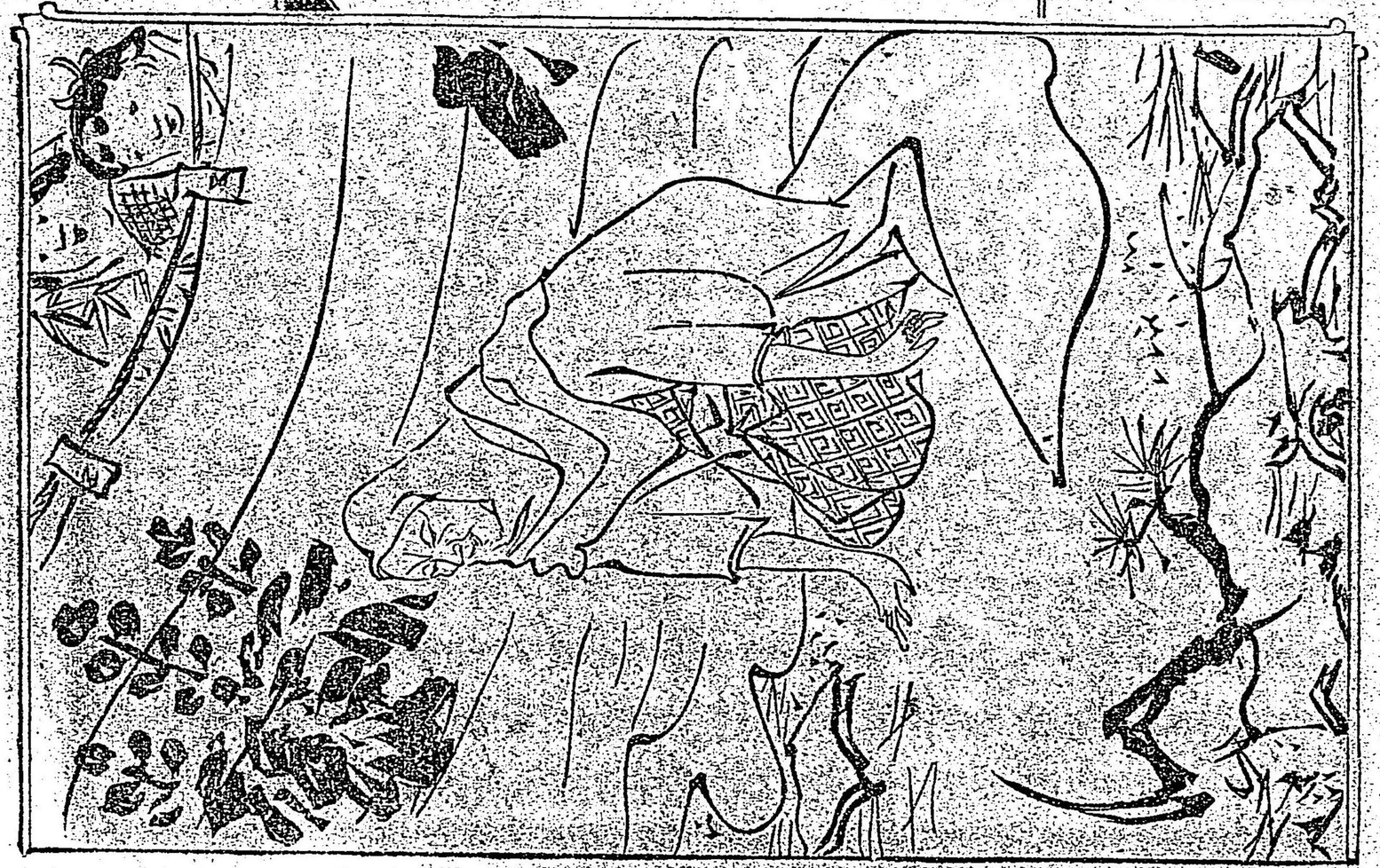
「頭欲下てそ頼みける

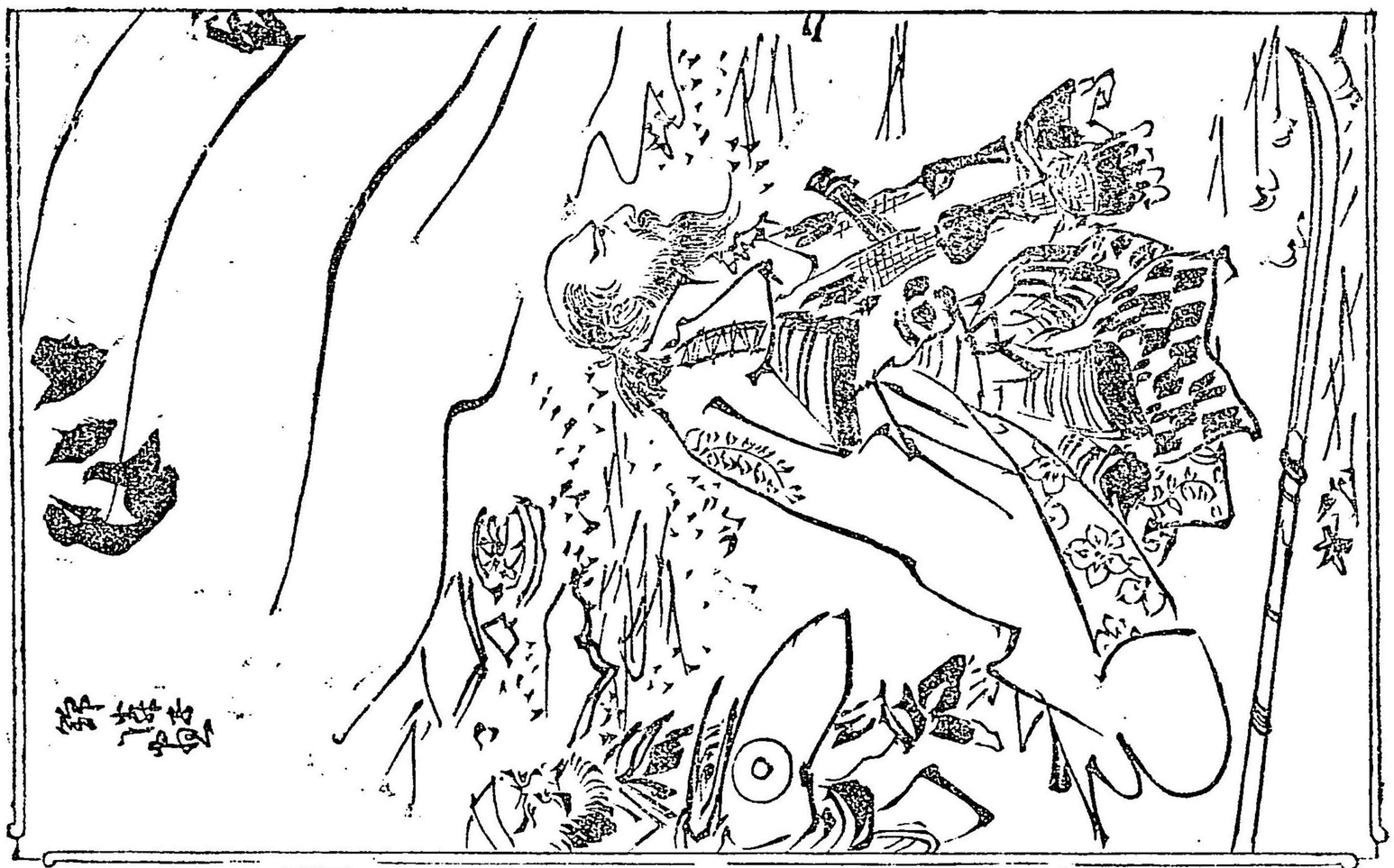
幸「唯今お取次致す程お暫らく夫にお扣へ被成せ

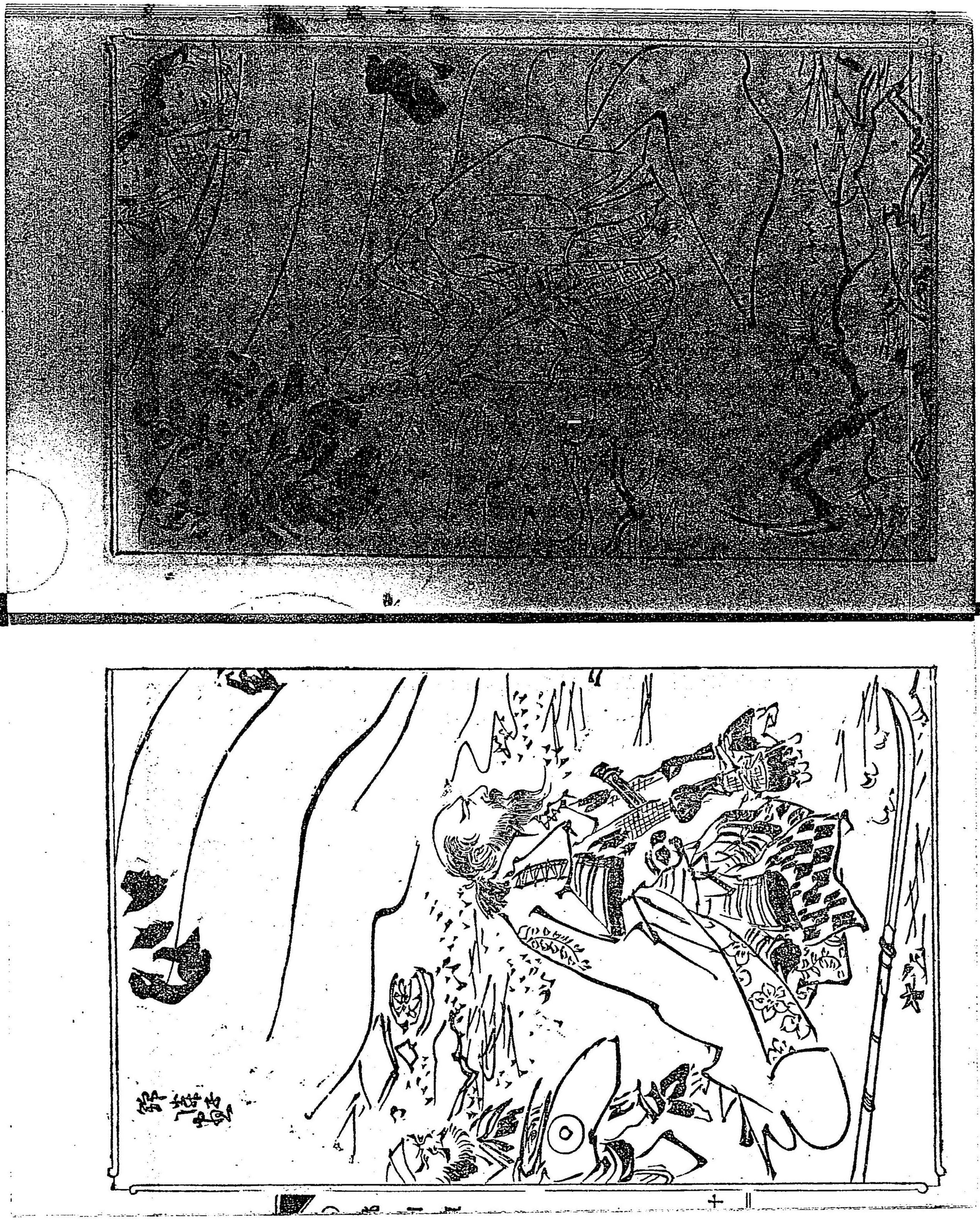
浄瑠璃

「云へ捨幕の内よ入る

幸「政所様へ申し上ます　政「何事あるぞ　幸「君の御不審蒙ふりて蟄居仰せ附られし肥後の城主佐藤正清來だ御免の御沙汰い無けれど此大地震に取敢ず君の御身をお案じ申し若御殿向崩れあば引退さんと屈强の家來共に悉く鉄の棒を所持致させ唯今駆附參られしたが如何取計ひしやうや此義お伺ひ申し上まする







浄瑠璃

「云ふに悦こぶ政所淀君はじめ力を得ト女性ハ皆々
嬉しがる久吉公を心中に嬉しく思へど素知ぬ顔

政「ナニ正清が参りしとか忠義一圖な心故誰彼に先達て能も早く参りしぞ　淀「力量勝れし主計頭が参りしとい何よりぞ　局○「殊にハ名たゝる家の子に鉄の棒を持せしとい　仝□「心利たる正清殿モウ〳〵誰が参らずとも　仝△「御殿の内ハ御安体　局皆々「お氣遣ひハ御座りませぬわいナア

浄瑠璃

「喜こび勇む局達久吉公を幕越しゝ見ゝは忠臣正清
に心の内に喜こび賜ひト其と云ねど皆々は心の
内に能く來たと喜び勇む風情なり

久「謹慎の身を省みず押て登城致せしハ予を案じてうせ居たか○ムヽヽ流石ハ忠義の　政、淀「エヽ　久「イヤサ中門の固めハ無きか誰が宥して通せしぞ　幸「五奉行始め諸役人誰も登城を致しませねば　久「中門の固め無と申すか　幸「左様に御座りまする　政「固め無故正清が是迄参りまするも君の御身を大切に思ふが故の事なれば唯何事も忠義にめで　淀「今霞駆附参りしを一ッの功にお目通りお免し被下まする様　皆々「お願ひ申し上まする

浄瑠璃

「詞巧揃へ詫ければ久吉公を愛臣ゑ免じ度思ど景色
巧替へ

久「イヤ〳〵免す事相成ちぬ予を甚覩にせし正清故目通り叶ハぬ追返せ　政「スリヤ折角参りし正清を　久「エヽ追返せと申すに　政「ハット幸藏主

に向ひ君の御機嫌悪しければ下城おす様申し附や　○「畏まりました」

浄瑠璃

「立んとすれば

久「コリヤ〳〵幸蔵主其方宜きに○イヤサ予が目通りい成ぬと申せ　幸「

ハヽッ

浄瑠璃

「御意次第心得幸蔵主御前を立て此方へ來りト正清と

打向ひ

幸「ハ待久しう御座さらう　正「シテ御前の首尾い如何で御座さナ　幸「御

勘氣の身の上乍ら君を大事に思召御登城ありし趣意と御前へ御扱露致

せし所敢所様淀様にも殊の外あるお悦び君にい未だお詞い御座りま

せぬが政所様御承知なれば先々御安心被成せ　正「スリヤ我君にい御

心解ぬお詞をも被下ぬとか　幸「左様に御座さする　正「左程迄正清をお

憎しみ被成さするか　幸「是と申すも侯人の石田尾西が讒言故　正「五ケ

年此方朝鮮にて艱難辛苦被成たる仮「忠心無二の人をば　幸「身の覚へ

あり御不審にて　小「御勘氣有い情けなし　堀「イヤ此上い我々が　荘「宜

々おいとへ皆々「お頼ひ申さん　正「ヤレ嘘やしい詐さらぬか陪臣の身を

以て上へ宜敷い失礼至極　荘「アヲ此儘に　皆々「致しでい　正「ふテ汝等

い帰を下りて中間際に扣へ居よ　皆々「ヨヤと申して　正「扣へいと申せ

ば扣へぬか　皆々「ハアヽ

浄瑠璃

「えつと計りよ郎等い主の詞よ是非なくそ皆一同に

引返す。跡に正清といきをつき

正「思ふ事云ざるい胸くるしく候故御身に語る此身の述懐一通りお聞

に向ひ君の御機嫌悪しければ下城あす様申し附や　○畏まりましさと

浄瑠璃

「立んとすれば

久「コヤヤ〳〵幸藏主其方宜きに○イヤサ予が目通りへ成ぬと申せ　幸「

ハヽヽ

浄瑠璃

「御意次第心得幸藏主御前を立て此方へ來りゝと正清よ

打向ひ

幸「聊待久しう御座さらう　正「シテ御前の首尾へ如何で御座さナ　幸「御

勘氣の身の上任ら君を大事に思召御登城ありし趣意と御前へ御扱露致

せし所政所様淀様にも殊の外あるお悦こび君にへ未だお詞へ御座りま

せぬが政所様御承知なれば先々御安心被成ませ　正「スリヤ我君にへ御

心解ずお詞をも被下ぬとか　幸「左様に御座さする　正「左程迄正清をお

憎しみ被成ずするか　莊「是と申すも侯人の石田尾西が讒言故　志「五ケ

年此方朝鮮にて艱難辛苦若被成たる　飯「忠心無二の人をバ　齊「身の覺へ

あき御不審にて　小「御勘氣有へ情けなし　堀「イデ此上へ我々が　莊「直

々お上へ　皆々「お願ひ申さん　正「ヤレ喧しい静まらぬか陪臣の身を

以て上へ直訴へ失禮至極　莊「デモ此儘に　皆々「致してへ　正「ハテ汝等

へ席を下りて中門際に扣へ居よ　皆々「ヤヤと申して　正「扣へいと申せ

ば扣へぬか　皆々「ハヽヽ

浄瑠璃

「えつと計りよ郎等ハ主の詞よ是非なくと皆一同に

引返す。跡に正清といきをつき

正「思ふ事云へざるへ胸くるしく候故御身に語る此身の述懐一通りお聞

被下○抑々五年以前三月上旬尾西行長佐藤正清朝鮮國征伐の先鋒仰せ付られ肥前名古屋表より一時に出帆致せし所行長某に意恨有て釜山海の先を取又王城へ責入にも我を偽わり先陣あし再度恥辱を採れども始終の勝こそ勝あれと倘敵中へ切入しに詞に似氣なき尾西行長明朝加勢の大軍に怖恐れて敗走あす跡に某踏止まり僅少勢で數ケ度の血戰はや是迄と死を極め打死あさんと思ひしゝ幾度と云ふ數を知ず唯日本の恥辱を思ひ五年が間朝鮮にて

○淨瑠璃

「雨にうたれ雪まとゝへ或ひえ野に伏山にふし

正「まッた嶽山ゐ立籠り數日の防戰兵粮盡し其時ゝ獸肉を以て飢を凌ぎ艱難辛苦致せしゝ詞を以て申し上ずとも痩衰ひし正清が此面体にて推量あれ

淨瑠璃

「鬼をとひしく正清が兩の眼に涙浮め

正「斯る難戰苦戰あせしも朝鮮國を亡ぼせとある主君の命を帶びて我日本の勇氣をば海外へ輝やかさんと忠義一圖にこつたる正清

淨瑠璃

「憶病未練な尾西に替へ御勘當は情けなし近頃女々歌事作ら

正「我三才にて親に別れ御前に於て人と成り十三才の初陣に敵の首級を揚たる時出かし居た虎之助子を親と思へ我また汝を子と思ふと雖有き御一言夫より數度の戰場に後ろを見せし事あき故御感狀の御墨附幾度となく頂戴なし家の寶に所持あす某其古へを思し召さゞ聊かの落度有とも御宥免有可き筈を佞人共の讒言にて御勘當とゝ情けなし三度の食

も咽へ通らず涙ても涙られぬ悔しさに嬰兒の折より泣ざる正清始て泪を飛へしぞ

○淨瑠璃

「拳双握り正清が悔〳〵涙ぞ哀れなる尼ハ實をと袖を

ぼり幕の内よを洩聞て大領始め政所共よ涙に呉た

まふ尼ハ漸〳〵涕をとらひ

○幸「其お歎きハ御尤認言故のお咎めあれバ嘸口惜う御座りよ去やう聞私さへ此如く袖を濡して御座りまする去乍ら我君も我子の如く思召す正清殿の事なれハ遠かふず御心解御免有に違ひハない夫に又政所様淀様が今雷早速参られし其功を幸ひにお執成遊ばせば少しの中の御辛抱必らず日頃の一ツ輪短慮をお出なさるゝお悪い事申さぬぞ○ホ、、、今天下無双の英雄あれど未刑紐の不時からお勘染の私故子供の様に思はれてッィ麁相申しましたホ、、、ー失禮御免致下よせ

○淨瑠璃

「勵き心双柔らぐる尼が詞よ正清を氣双取直し打頷

狀き

正「此上共にお執成政所様淀様へ其の許から願ふて被下○何ハ搭別今雷の大疑未だ夜明に程もあり夜中御門に警固の無ハ警へにも云ふ油斷大敵今太平とハ申し乍ら此衆に乘じ野心の者忍び込んも計り難し主計頭中門の警固致さふと存するが如何で御座らふる　幸「御尤ともある其仰せお伺ひ申すで御座りましやう

○淨瑠璃

「又をや幕の中へ入り政所へ打向ひ

幸「唯今正清が申せし事お聞取遊ばしましたか　政「聞も哀れな長物語大

あ明くまで、なら寸躾ても乗られぬ悔しさに要見の折より泣ざる正清始て泪を見せしぞ

○淨瑠璃

「涙ぞ哀れなる尼が、賈をと袖とゝ絞が握り正清が悔し涙ぞ哀れなる尼が、賈をと袖とゝ

ほり幕の内ゝを洩聞て大領始め政所共ゝ涙に呉た

○幸「其ゝ歎きい御道理言故の谷めあれで嘸口惜う御座りは去やう聞

ゝ今天下無双の英雄あれと宋相迦の才時から恥の一つ鯨つ短慮お出なさる、寄恥いすい申さねそ○

必ら

正清の御心解御発有に進ぜゝ夫れ政所様淀

私さへ此如く祖を惜しで御座りする当年ち我君も我子の如く思召す

様から幸に成遊はせは少しの中の御弔抱

思はれてッィ麁相申しさしたホ、、、、ー失禮御免致下させ

○淨瑠璃

「剛き心状柔らぐる尼が詞ゝ正清を氣状取直し打頷

狀き

正「此上共にお執成政所様淀様へ其の許から願ふて被下○何い搭別今雪の大変未だ夜明に程もあり夜中御門に警固の無い譬へにも云ふ汐断大敵今太平と い申し乍ら此事に乗じ野心の者忍び込んも計り難し主計頭中門の警固致さふと存ずるが如何で御座らふ　幸「御尤ともある其仰せお伺ひ申すで御座りさしやう

○淨瑠璃

「又ゝや幕の中へ入り政所へ打向ひ

幸「唯今正清が申せし事お聞取遊ばしさしたか　政「聞も哀れな長物語大

概是で聞たわいノ　幸「夜中と申し此騒動御中門の警固をば致さうと申されまするが如何計ひましうや此儀お伺ひ申しまする　政「ナヽ中門の警固致さうとい能心附さ事でい有未だ誰も出仕せねば警固の無い不用心　淀「正清が警固致せば千万人に勝れし力量何者が参らふとも心丈夫で御座りまする　政「我君様警固を申し附ましやうか　久「揚當あせし正清に予い警固い申し附ぬ夫等の事い問に及ばぬ其方達が勝手に致せ

○浄瑠璃

「籠る情けの御詞政所え喜こび賜ひ

○政「我君にいお詞なけれど自分が氣遣ひ故御門の警固致す様申し附てたもいノ　幸「畏まりまして御座りまする

○浄瑠璃

「幸藏主ばとつかえい元の所へ立出て

幸「唯今お伺ひ申せし所君にいお詞あけれども領狀せ賜へしのみ政所様御承知あればお警固を被成ませ　正「イヤ夫い千万忝けおい御許容ある上からい中門の警固致すで御座らふ

○浄瑠璃

「正清ハ突立り○(飛立計りの嬉しさに向ふの方み打向ひ

正「ヤア〳〵夫に扣ひし家來共正清中門の警固致せば前後の警護仕つれ家來大勢「ハア、ヽリ　正「左様御座らゝば幸藏主　幸「お心留なふ　正「パリヤ警固致さふか

○浄瑠璃

「勇こ進んで長刀抱ひ込み鬼神を恐るゝ勢ひよて御門ゆきして急き行○(久吉公ハ恍惚と我を忘れて延

上り後ろ姿を見送らる）

政「御前様」　淀「御前様」　政、淀「御前様へ（ト大きく云ば　久「チヽ、何じや　政「正清を御覽　政、淀「遊ばしましたか　久「我に背きし不屆奴憎しとゝ思へ共朝鮮國より歸朝の後目通りを遠ざけし故彼が面ゝ見ざりしが嗽ゝ痩せ餓ゝ延び替り果たる（ト愁を催ふし）イヤ替り果たる不忠者めが　政「今正清が幸藏主へ五年此方朝鮮にて種々様々な難義を爲し聞も哀れな物語り　淀「以前に替り顏痩て見影も無容体アノ大兵お正清が見すぼらしく見るのも君の御不興受し故　局○「日夜夫を苦勞に爲し夜もろく〳〵枕に附ず三度の食も斷しとやら　全□「長の旅路の勞れの上夫でゝお痩つれ敢成箸　全△「耶譯知ぬ私共まで共に哀れを催しまする　政「尾西石田が訴へにお腹立ゝ去る耶午ら不骨ゝ常の生れ刑人の憎みゝ受れども忠義一圖ゝ申さすとも今雷の地震に人先へ馳附參るゝ何より證據　淀「千

上り後ろ姿を見送らる)

政「御前様へ(ト大きく云ば　久「ナ、何じゃ　政「正清を御覧　政、淀「御前様　政、淀「遊ばしましたか　久「我に背きし不屈奴憎しとゝ思へ共朝鮮國より歸朝の後自通りを遂ざけし故彼が面ゝ見ざりしが顔ゝ痩髭ゝ延び替り果たる(ト愁を催ふし)イヤ替り果たる不忠者めが　政「今正清が幸藏主へ五年此方朝鮮にて種々様々な難義を爲し間も哀れな物語り　淀「以前に替り顔痩て見影も無容体アノ大兵な正清が見すがらしく見るのも君の御不興受し故　局○「日夜夫を苦勞に爲し夜もろくゝ枕に附ず三度の食も勝しとやら　全□「上の旅路の勞れの上夫でゝお痩つれ彼成箸　全△「事譯知ぬ私共まで共に哀れを催しする　政「尾西石田が訴へにお腹立ゝ去る事乍ら不骨ゝ常の生れ附人の憎みゝ受れども忠義一筋ゝ申さすとも今彼の地震に人先へ馳附る ゝ何より證據　淀「千万人に勝れし身が泪をこぼすゝ能々に悲ひ事と正清の心の中が思ひ遣れ共に袖をぬ濡しました　幸「猛きお方の落涙ゝ取分哀れよ存じまする夫に附きまして正清殿の忠義にめんじ朝鮮にての無調法何卒お免し賜る樣此義願ゝまふ存じまする　久「外なふぬ幸藏主が詫言聞入ぬにゝ有ねども仮初の喧嘩と違ひ彼ゝ軍令を背きし奴左樣容易ゝ免されぬと　幸「御尤なる君の仰せ遮斷て申し上るゝ恐れ多き事乍ら正清殿ゝ幼きより君に仕へて忠義厚く次第ふ戦功顕ゝして我君の思し召に叶ひ今一城の主とあり其お恵みを束の間も忘れぬ事ゝ日頃あふ私への物語り夢聊かも別心おきゝ宜存じて居まする古しへの例しにも忠臣を遂ざけて遂に其國の亡びしゝまゝ有事とやら歎ありませぬ此尼が申す迄にゝ御座りませぬと好御家來ゝ天下の御賓忠臣の聞ゑある正清殿識者の雲に羅れて懸し居ゝ傷しき歎ゝし事故に何卒お心解ますれば有難ふ

存じまする　久「再三の願ひなれど其義い何も　幸「デハ御座りませやう
あれを哀れ虎之助の昔しを思わけさせられ唯管御勘氣御免の義願いし
ム存じまする　政「事を別たる幸藏主がお詫事お憎しみも御座りましや
うなれど以前盡せし忠義にめで何卒お心和らげられ　淀「御勘氣御免被
下さす樣私と共〻に　皆々「お願ひ申し上まする

〇淨瑠璃

「女義は詞と和らふく執成し賜へば大領も御不便な
れど武れ表態と色目よ見せ賜へ

久「朝鮮國にて正清が自儘の働き致せしも我手許にて育ちし故主從の禮
を失ひ我意に驕りし不屈奴夫故に勘當致せしからい予が不審の申し譯
相立ば免し呉るが左も無中い免されぬ。よし又今零騙附しを一ッの功に
免すにせよ虎之助の時分と違ひ今一國の城主たる佐藤主計頭正清が女

の詫で濟だと申さば諸大名への聞ても悪く兼廉か勝家でも詫をせすい
恥辱であらふ

〇淨瑠璃

「御座敷立んとし賜へば
政「アヽモシ仰せの通り私共がお詫なしてい後日の恥辱唯御心さへ解ま
すれば　淀「表向にてお詫を願ひ　幸「頓て日出度お目通り　久「夫も天下
の大法故道が立ねば免さぬ正清　政「汚名に暗き其道も　淀「忠義の道の
露いれて　幸「直ある道よ便りあば　政、淀、幸、三人「其時こそい　久「アイヤ
天下の道に(立上りて)依估い無ひへ

〇淨瑠璃

「實にも勇々しき　(ト引取三重にて幕)

有しまする久「而三の願ひなれど其義い何も幸「ヲヽ御座りませやう
あれと義虎之助の者しを思わけさせられ唯管御勘氣御免の義願いし
ん存しまする政「而を別れる幸「職主がお詫事お憎しみも御尤りましや
ちなれと少前盡せし忠義にめで何卒お心和らげられ淀「御勘氣御免歌
ぞす樣ねと共〳〵に皆々「お願ひ申し上ぞする

○浄瑠璃

「太義ば詞と和らぐ執成し賜へば大領と御不便な
れと武士表態と色目見せ賜へと
久「則目向にて正清が自性の勘ら我せしが我手許にて育ちし故主從の禮
と実ひ恥意に背りしネ屈奴共故ば勘當致せしからい子が不審の申し譚
相立ば発し呉ら左無けれ共ふし文今拳騎附しを一ツのあに
屈ぞとせよと山の照分と並ひ今一國の城主九る佐藤主計頭正清が女

の詫で濟だと申さば諸大名への聞ひも悪く兼廉か勝家でも詫をせずい
恥辱でわらふ

○浄瑠璃

「御座ば立んとし賜へば
政「アヽモシ仰せの通り私共がお詫なしてい後日の恥辱唯御心さへ解ぞ
すれば 淀「表向にてお詫を願ひ 幸「頓て日出度お目通り 久「夫も天下
の大法故道が立ねば免さぬ正清 政「汚名に喘き其道も 淀「忠義の道の
露われて 幸「直ある道ゑ便りあば 政、淀、幸、三人「其時こそい 久「アイヤ
天下の道に(立上りて)依估い無と へ

○浄瑠璃

「實にと勇々しき」(ト引取三重にて幕)

●三幕目より

（地震ゆ崩れし石垣へ、幕打張りて威かめしく筋鐵入の中門を囲の武者ゐ佐藤の家の子、飯田に齋藤、小開、堀本、手に手に鐵棒携さひて、警固ゐすてそ勇しく時の太鼓ぞ鳴り渡る）

床の淨瑠璃

「基礎堅き城門の家根の瓦とぶちこぶちこ燃立つ火れ手汲かゝりと爲し佐藤れ家來ハ中門口ゆ入や來る

と待所へ石田光成歩行立にて家來引連入來る

（時の太鼓と諸共ゐ石田光成とつかゝと、烏帽子素袍に太刀を附け股立ち高く足輕二人、引連れ來り向ふを見渡し　石田「ハテ心得ぬ此天災に何者か我より先へ出仕ゐし中門を囲め居とゐ心憎き奴でゐある。先へ參つて開門させよ　足輕「畏てまつて御座りまする

○淨瑠璃

「光成此方へ、ゑめば家來ハ先へ驅拔て

逕「御門番衆々々御開門被成い　飯田「イヤ夜中と申し斯る時節開門ゐ致されぬ　逕「イヽヤ苦ゑふ御座らぬ御開門被成い　齋藤「唯今出仕ゐ何者ゐるか其姓名　飯、齋、小、堀、の四人「名乘り召れ

○淨瑠璃

「云ふ〻石田ハ堪へかゐね

石「ヤア名を名乘れとゐ無禮至極我を知ふぬゐ何奴なるか石田治部少輔光成ゐるぞ　逕「とく〻開門致されい

○淨瑠璃

「石田と聞て又藏隼人幕の内より立出て

莊林「イヤ何方々迂活に開門致されゐ地震の搖たゐ夜半過ぎ　志村「最早

東方が白みしよ今時分のめ〳〵とよもや治部い参るまい　飯成程御雨所の仰せの通り誠の治部でい御座るまい　齊察する所此虚と聞り聽病者の名を騙り　小野心ある者其が忍び込んも計り難し　堀筲と實否を糺さねゞ此中門い　皆々通されぬ

○淨瑠璃

「詰り掛れば せき立て

石「ヤア最前から我に向ひ何故斯樣に悪口申すぞ今天下に於て光成と治部抔と下賤同樣呼なすい何奴あるか名を名乘れ其分ゝい致さぬぞ

○淨瑠璃

「いえせを果ぞ

莊「問ずとも名乘り聞さん聽病未練な耳に聞慣ろひて目を廻すな　志「今將此所の當番い大政所の命を受け肥後の國熊本の城主　石「ヤ、何と「幕の内に聲あつて」　正「佐藤主計頭正清あるぞ

淨瑠璃

「幕　双ゐゝげて出たるえ百千の雷と一度に落來る如くなり（正清長刀小脇に抱込突、立上り）

正「斯石垣迄崩るゝ程の前代未聞の大地震某一に驅附て此所の固めを爲すに何奴抔とい奇怪至極　莊「其方より此方で其分ゝい　皆々「致さぬぞ

石「ヤア返す〳〵も憎くき雜言朝鮮より歸朝の後御不審の廉々有て蟄居仰せ附られ御勘當の正清が謂れなく出仕なし何故ケ樣な振前致すぞ

莊「イヤ謂れ無事に非ず近代稀なる大地震若御殿に變あらば君をお助け申さんと取る物も取敢ず急速に出仕せしい主人正清が一世の忠義志「大領の御身の上に御別條なければこそ今頃のめ〳〵御座ても石田で候の治部で候のと大きな顔をさつしやるが變が有たら何如さつしやる

東方が白みしよ今時分のめ〳〵とよもや治部わおるまい飯成程御雨所の仰せの通り獻の治部でわ御座るまいと賛察する所此盧と諜り腦病者の名を聞り小野忠わる者共が忍び込んも計り難し堀一篤と實否を糺さねば此中門は皆々通されぬ

○御殿場

「請け相れば出さ立て

石「ヤイ最前から〳〵我に向ひ何故斯様に悪口申すぞ今天下に於て光成と治部抔と下賤同様呼ぶか何奴なるか名を名乗れ其分よわ致さぬぞ

○陣場場

「いたせと果て

莊「問はそも名乗り御ざん腦病未練な耳に聞登ろひて目を廻すな志「今此所の當番わ大阪所の命を受け肥後の國熊本の城主石ヤ、何と（幕の内に聲あつて」正「佐藤主計頭正清あるぞ

御殿場

「幕攻ら丶げて出たるゝ百千の雷と一度に落來る如く（なり（正清長刀小脇に抱込突、立上り）

正「斯石垣迄崩る丶程の前代未聞の大地震某一に驅附て此所の固めを爲すに何奴抔とわ奇怪至極　莊「其方より此方で其分ふわ　皆々「致さぬぞ

石「ヤア返す〳〵も憎くき雑言朝鮮より歸朝の後御不審の廉々有て蟄居仰せ附られ御勘當の正清が謂れなく出仕なし何故ケ様な振前致すぞ

莊「イヤ謂れ無事に非ず近代稀なる大地震若御殿に變あらば君をお助け申さんと取る物も取敢ず急速に出仕せしい主人正清が一世の忠義志「大領の御身の上に御別條なければこそ今頃のめ〳〵御座ても石田で候の治部で候のと大きな顔をさつしやるが變が有たら何如さつしやる

石「ヤ　莊「夫でも天下の役人の　志が濟ふと　皆々「思ひッしやるか

石「ムヽヽ　正「君命に依て此所を正清が固めおすに遲刻の上に兎や角

と云立致すい不屆至極　飯「押て此所を通るに於てハ　齋「君命背くも同

じこと　皆々「其分おい致さぬぞ　齋「ヤア最前から嘿つて扣かへ居れい

主人をバ蔑視ろにする不禮者イデ某が

○淨瑠璃

「口にハ云へど手ハぶる〳〵主に賀ぎる臆病者

石「コリヤ〳〵運平扣へぬか　運「デモ此儘おい（運平刀の柄へ手を掛る）

正「何を小癪な

○淨瑠璃

「えたと睨む正清が眼の光りに轉倒うへつを齒の根を

合ず震ひ居る

石「ヤ　莊「夫でも天下の役人の　志が濟ふと　皆々「思ひッしやるか
石「ム、、　正「君命に依て此所を正清が回めおすに迂闊の上に兎や角
と云立致すの不屈至極　飯「押て此所を通るに於ては　齋「君命背くも同
しこと　皆々「其分ふい致さぬぞ　齋「ヤア最前から嘴つて抑かへ居れい
主人をバ蔑視するの不禮者イデ其

○淨瑠璃
「口にハ云へど手ハふる〳〵　主に負ざる臆病者
石「コリヤ〳〵　運平抑へぬか　運「デモ此儘ふい（運平刀の柄へ手を掛る）
正「何を小癪な

○淨瑠璃
「たたと睨む正清が眼の光りに輝かへつて海の根を
合ぢ震ひ居る

石「磐へ固めを仰せ付られ當所の番を致すにせよ石田を通さぬ謂れなし開門なして通さぬか　正「イヽヤ通す事罷り成ぬ　石「スリヤ何有ても
莊「腕づくなふバ　皆々「通し呉ふ　石「何を

○淨瑠璃
「光成刀へ手ぞ掛る既に斯よと見へる所へ（運平氣ぞ
揉止むる折柄向ふより）
兩人「アイヤ御兩所暫らく〳〵

淨瑠璃
「と聲ぞかけ（常磐早田の兩老臣烏帽子大紋太刀ぞ附
け靜々と出來る
常「御兩所の今の騒動常磐駿河守　早「早田勝家お預かり申すお靜まり
兩人「被下い　石「是い〳〵　三老職の常磐殿早田殿　正「絶て久しき御兩公

先々是へ　常、早「然らば御免」ト兩人い門の中へと入來る　常「佐藤氏にい我君の御不審有て歸朝故未だ面會致さゞりしが　早「衆に勝れし豪傑故五ケ年此方朝鮮に出張有しが以前に替らず　正「各々方おも御堅勝にて　常、早「祝着至極ふ　三人「存じまする　常「夫い偖置此場の爭論唯今あれより見聞せしが譬へ君命あれば迚當時五奉行の石田殿開門なくば其許の○イヤサ其許の御無念にい我々が致さぬ程に開門あつて然るべし　早「若又上より谷あらば駿河殿の仰せの如く我々兩人引受て貴殿の落度に決して致さぬ御疑念無に正清殿開門なしてお通し被成い　正「御兩公の詞おく〻で開門い致さねど常磐殿早田殿にい正清願ひの筋あれば開門おして通すで御座らふ　常「スリヤ我々共兩人が詞を用ひて正清殿おい　早「開門おしてお通しあるとか近頃以て忝けなし

○淨瑠璃

「いふに正清家來よ向ひ正「コリヤ家來共役目の怠り無き樣能く改めて通すがよい　皆々「心得まして御座りまする　志「豫て噂に聞及ぶが石田殿い身の丈低く　飯「骨細にして色白く　齊「痩衰ろひ夫のみならず　小「臆病らしく見へるとあるが　堀「成程人の云ふ通り　正「臆病さうで御座るわい　皆々「ムヽヽハヽヽヽヽ

○淨瑠璃

「嘲弄なせば堪へぬ光成

○石「御兩所の御挨拶に扣ひて居れば宜事と正清のみか家來迄人もあげある其雜言聞捨にい致さぬぞ　常「アイヤ光成殿お持被成い御立腹い御尤も乍ら何事も今雪の天變人氣も立て居る事なれば唯穏便に此場い此儘　早「我々共にお預け被成片時も早く御登城あつて君の御機嫌伺われ

「いふに正清家來よ向ひ

正「コリヤ家來共役目の怠り無き樣能く改めて通すがよい　皆々「心得

まして御座りまする　志「摠て噂に聞及ぶが石田殿の身の丈低く　飯「骨

細にして色白く　齊「痩衰ろひ夫のみならず　小「臆病らしく見へるとあ

るが　堀「成程人の云ふ通り　莊「臆病さうで御座るわい　皆々「ムヽヽヽ

ヽヽヽヽ

○淨瑠璃

「吻弄なせば堪へぬ光成

○石「御兩所の御挨拶に扣ひて居れば宜事と正清のみか家來迄人もゐげ

ある其雜言聞捨にハ致さぬぞ　常「アイヤ光成殿お持被成い御立腹ハ御

尤も乍ら何事も今雷の天變人氣も立て居る事なれバ唯穩便に此場ハ此

儘　早「我々共にお預け被成片時も早く御登城あつて君の御機嫌伺われ

よ　石「ヂモ此儘にい刀の手前　常「御了簡の成ぬのも今雷の地震に一の登城君命受ての固めあれバ　早「役目に免し我々にお任せ有て御登城召れ　石「了簡ならぬ所あれど御両所にお任せ申す如何にも登城致すで御座らふ　正「夫家來共開門致せ　莊「臆病者の　皆々「通行あるぞ(門の内に大勢が)「アヽヽー　石「何を(常磐い立て石田を止め)　常「ハテ何事も我々に　石「左様御座らバ御両所　早「イザ御同道　両人「致すで御座らふ

○淨瑠璃

「事成好まぬ計らひよ是非なく石田と打連て御門の内へ入ける

(常磐を先に石田に早田家來附添内に入る石田が足輕迎平い一人領狀穏れたり)

淨瑠璃

「跡に正清ぞく〳〵悦こび(正清路成見送り作ら)

正「偖〳〵宜心持せあつさ　莊「殿河殿早田殿御座らずば心の儘に悪口あして腹を立せ　志「手出をあさば諫言あせし意趣晴しに我々が　飯「筋骨抜ふ者殘念な事で御座つた　齊「俳し彼い佞姦故　小「又もや君へ如何様あ　堀「諫言おさんも計られず　莊「必ず御油斷被成ずるな

○淨瑠璃

「氣遣ふ後徒へ幸藏主

幸「イヤ其お氣遣ひにい及ばぬわいノ　正「ヤァ左云御身い幸藏主　莊「シテ氣遣ひの無と云ふい　幸「君のお心が解ました　正「ナニお心が解しとかシテ〳〵夫い誠との事か　幸「政所様淀様が今霜早速驅付られし其功しを申し上我君様への御詫言に先お心い解されど正清とも云いるゝ者が政所の詫言で勘氣がもりてい後日の恥辱と表向駿河殿のお詫で御前

へ、お召にあり御不審の廉々をお尋ね被成し其上あてお免し被成るゝ思し召今にお使者が参らふ程にお悦こび被成させ　正「スリヤ政所様淀様のお執成にて正清が御勘氣御免被下とか　皆々「御主君　正「皆の者　莊大慶至極に　皆々「存じまする　幸「併し御不審の廉々い君より直にお尋ねあれば申譯の立様に其お覺悟なされさせ　正「忝けなきお心添其御不審い朝鮮にて尾西を堺の町人と誹謗せしと二ッにい御免しもおき豊臣の姓を名乘りしお咎め御前に於て直々に申し開き致すで御座らふ　幸「其申し譯さへ立さすれば以前に替らぬ御愛臣　正「是と申すも昔し馴染幸「藏主の執成故　莊「家臣一同　皆々「御禮申す　幸「何の御禮に及びさ、やう素より尾西が讒言故御不興蒙むる正清殿お心解しい忠義の功し斯無ていなりさせぬわいノ　正「五ケ年此方朝鮮にて艱難辛苦の甲斐も無く君の御不興蒙ふりしい我信仰おす法華經の高祖の御難に異ならず

幸「土の牢にも勝りたる蟄居の御身に日の目も見ず仇に月日も龍の口正「其敗皮と首の座と既に極りし正清も　幸「政所のお執成い日輪愛に降りし如く　正「身の浮雲も晴渡り　幸「又も忠義の輝くい　正「申比ケ濱邊に折寄る　幸「涙おみなゝぬ法華經の　正「是も功力で　兩人「ありしよな（鶏鳴くに心附き）　正「最早鶏鳴　幸「君の御前へ少しも早く　正「左様御座らは幸藏主　幸「サヽ御案内致しやう（兩人い立んとする折柄先に穏れし石田が家來鉄炮抱へて出來る遯平正清目掛て放んとすれば正清目早く眼を附て眦みつくれい遯平い鉄炮落してもんとり打宙を轉して倒るれば）　正「ムヽヽ○ムヽヽヽヽ——（幕）

●四幕目

伏見の城中上段の間ある爛ゆき金襖五三の桐の紋散し高麗縁の畳をば

二重に累ね裃を敷き小性を從かひ久吉公左右に常磐石田早田其他諸國の諸大名烏帽子素袍に威ケめしく列も正しき大廣間

浄瑠璃

「東雲の朝日輝やく城中の上段に間より久吉公左右より並ぶ大小名神を連ねて扣へ居る

久「何如に駿河今曉夜半の大地震遽の予も驚怖なし女はらと諸共に廣庭へ立退しが身に聊か輕微おきぬ未だ運命盡ぬと見へる　常「恐れ乍ら我君の實ふも朝日の登るが如く御昇進在せして今一天下を握り賜ふ比類おき御高運　早「是迄數度の戰爭に雨霰と射る矢の中を過れ賜ふ我君故お輕微の有ふ筈わなし　石「俳し天災の免れ難きにお輕微の無の大慶至極　常「殊に城中此所彼所倒れ傾ふく其中に是ある君の御座の間のみ聊か破損の樣子なく　早「御身に別條非ざるの是全く君の御武德　石「臣等一同　皆々「恐悅申し上奉さうる

○浄瑠璃

「一同祝し奉つれば大領御機嫌斜めならぬ

久「其際搖返しの未だ正ざる其所へ宙を飛で驅付しの我目通りを遠避し肥後の城主佐藤正清朝鮮國にて不屆せし放惚き奴での有なれど驅付しの一ッの功勞て駿河早田より寛仁の歎願あれば唯今是へ呼出し不審の條々尋ね問ひ申し譯相立ば勘當免し遣のさん　常「ハヽ難有き其御詫正清事の幼年より御手許にて人と爲り一方ならぬ御愛臣　正「殊にの正清十三才の初陣よりして戰場にて數度抜群の手柄あれば其等の功を思し召さん　大名い「御不審の申し譯　全ろ「相立し其上の　全は「寛仁の御沙汰にて　全に「御勘氣御免被下らは　全は「列侯一同如何計り　皆々「有難ふ存じまする

浄瑠璃

「諸侯一同寛仁を願へば石田光成が

石「正清事い御愛臣今雷の地震に驚付しを一ッの功に御助命あるい寛仁の御所置乍ら若御不審の其廉々申し譯の相立ねば上を偽とる大罪人夫でも御助命遊ばしまするか

○浄瑠璃

「君父尻目よ光成が詰り掛れば久吉公

久「ソリヤ其方が申さずとも我不審の申し譯立ねば正清迚何條其儘助け置ん天下の政治に依估い無い彼に切腹申し附ん　石「イヤ切腹とい能御所置一天下の御政治い左様あくてい叶へませぬ　常「併し正清御不審の申し譯相立なば科の次第を訴へし石田殿にも其儘に素知ぬ振でい居れまするい　石「ハヽヽヽ　早「申し譯相立ば上を偽とる光成殿貴殿も切腹召るで有ふナ　石「ヤ卑竟に其許も一命おしみ致されまい

石「サア夫い　早「切腹召れぬか　常「サア　兩人「サア　三人「サア〳〵〳〵

常「當時君のお覺ゑ目出度五奉行職の光成殿が命を吝まれてい天下の政治が　兩人「悖りましやう　石「ハヽヽヽ

○浄瑠璃

「理の當然に光成は言句を出さ和へ居る

久「何い兎もあれ不審の正清我目通りへ呼出せ　ろ「畏まつて御座りまする（下席を立て下手に向ひ）夫に扣へし肥後の城主佐藤主計頭正清殿君の

お召急いで是へ

○浄瑠璃

「呼次聲と諸共に

正「唯今參上仕つる

○淨瑠璃

「萬夫不當の英雄を身の御不審にしほ〳〵と素袍の袖攻ふき合せ御前遥かに平伏なし（正清鎧の其上よ素袍を着し右手差のうにて出來る

正「火急のお召に昨夜の儘衣服をも改めず失禮の段幾重にも御宥免被下ましやう

○淨瑠璃

「首攻すりつけ敬ひば

常「イヤ正清殿我君のお召あれば早「遠慮召れずお進み被成い　正「オモ御勘氣の拙者故い「アイヤ君のお召　皆々「急いで是へ　正「ハッ（ト躊躇は）　久「苦ふない近う參れ　正「ハッ

淨瑠璃

「上意よ正清靜々と御前間近く扣ゐれば大領つくづく見やり賜ひ

久「主計頭面を上い　正「ハッ　久「コリヤ正清偖〳〵其方い幾歳に成ても幼少時の心失ず其往昔虎之助と申し我小性を勤めし折も今一國の城主となり朝鮮征伐の大將を勤むる折も同じ邪朋輩とせり合致し何故尾西行長を堺の町の町人と惡口なして日本に人おき樣に申せしぞ是汝へ不届の第一ヨッさ大明への勅答に免しも無に豐臣の正清とい何故印せしぞ汝ぢ能く承よれ豐臣の姓を免せしい久家久康久俊の三人の外天が下に免せし者皆てあし誰が免して朝鮮にて豐臣とい認めしぞコレ幼年の其折より我傍に居たる故主を主と思はぬ故か此二ケ條い何如なるぞ　正「何如にも尾西行長を町人と罵晉ヨッたお免しも無き豐臣の姓を

名乗りしも正清深き所存の御座れど君へ直々申し上んも御勘氣の身に恐れあり常磐公此儀何如仕つりましやふや　常「其儀い少しも遠慮に及ばす直々に申し上られよ　石「イヤ御直答い恐れあり何事も此場でい申し上ぬが其身の爲　早「イヤ〳〵御直答わて苦しからす片時も早く演說召れ　正「委細畏まり奉つる　い「猶豫致さず正清殿疾々　皆々「申し上られよ　正「ハッ唯今言上仕まつる

○淨瑠璃

「申し上んと座を進み

正「抑々文錄元年三月上旬朝鮮國征伐せよと我君の命を蒙り尾西行長斯云ふ正清其外從がふ大小名追風を受て肥前より數艘の軍船出帆なせしに暴風烈しき夜ゐ紛れ約を變じて扳騮の尾西が爲ゐ口惜や釜山海を乘り損し南無三方

○淨瑠璃

「折しを烈しきかぐなみお波し逆卷波に櫓を押し立

熊川港へ亂入り

正「慶尙道にて尾西に出逢ひ彼が手立と知すして須路と聞て平安道へ進みしも渡るに難き早瀨の大河

○淨瑠璃

「翼なけ身ば躊躇うち

正「水練得たる家の子共逆卷く水へ飛入りて向ふの岸に擬ひだる船と奪ふて渡れども二日遲れに王城を又候尾西に先陣され

○淨瑠璃

「歟え尾西が鋒先に不意を打れて散々に

正「國王季昫ハ義州へ落ち臨海順和の兩皇子ハ鳥嶺國へ落しと聞き責て
ハ是を生捕て手柄に成んと跡追驅兩皇子を難なく生捕君の仰せハ無れ
ども兀良哈迄攻入て勝誇たる其折柄

○淨瑠璃

「落城なせし朝鮮の加勢に潮の湧如く

正「大提督季如松が四十万の大軍にて押寄來ると聞怖して臆病未練の尾
西行長

○淨瑠璃

「敗走なしと我先よ磯の千鳥の群立ごとくむら〳〵

バット

正「ウ、ム、ハ、ハ、ー

淨瑠璃

「崩れ立ち

正「或ひハ伐れ

○淨瑠璃

「あるひハ逃去り

正「朝鮮國に殘りしハ斯申す正清が麾下に從がふ者計り

○淨瑠璃

「其時公使來り

正「正清が生捕し兩皇子ハ云ふに及ばず竝びに朝鮮一の美女孟神女を此
方へ其儘渡さば一命助け數千艘の船を以て日本へ歸るべし又勅諚を背
くに於てハ四十万の大軍にて

○淨瑠璃

「波の哀れや大洋の藻屑なをんと日の本よ

正「人も無なる憎くき廣言　久「シテ其折柄大明の勅使へ何と答へしぞ

正「去れば其時我腦病を働らきおば是日本の恥辱故勅答書を認めし其文に女童ゝ兎も角も兩皇子ゝ日本へ伺ひし上あらでゝ渡す事相成すさた此地へ打手に向ひ敗走なしたる行長ゝ元堺の町人にして至つて臆病未練あれど此地の地理を知さる故敵地へ踏込む案内者彼ゝ軍の大將ならず誠日本の大將ゝ斯云佐藤正清あり四十万騎ゝ思かあ事ナニ

○淨瑠璃

「數百万騎の軍勢を我に向なば忽ちに大明迄を追詰々々追まくり支那四百餘洲悉亡せし灰燼よなす

べしと

正「君の御威光海外へ輝かさん其爲に斯の如く認めたり

○淨瑠璃

「斯の如くと正清お有し次第、物語れば人々實にと感心なし

常「シテ其美女ゝ大明の勅使へ返し遣はされしか　正「美女ゝ則ち城外に立て柴穂長の鎗を以て芋差に突貫ぬき大明人に見せしかば舌を振つて恐怖おし夫よりして正清を鬼小官と稱せり　石「シテ又君よりお免しあきに豐臣の姓を名乘りしゝ　正「此正清三才の折父、彈正に死別れ夫より君のお側にて漸々と人と成りたる折佐藤の苗字を存せし計り氏も系圖も知らざる故勅答の書に差支へ豐臣の正清と御免し無に書き記せしゝ日本勢の總大將と明朝へ申せし故此身を人の怖るゝ樣君の御威光首に

頂だき彼地を征伐あさんが爲　早「シテ〳〵其後の合戰い　正「されば夫より短兵急に悠奏館を責落し安南府城に十萬餘騎猶籠り居さるを其夜の中に落城させ明朝隨一の猛將たる魔義將軍を討取て逃殘りたる殘兵を早瀬の川へ切て落し晉州城にて要界の堺を碎いて先登なし牧師王僧鱗を討取り又安康にて大明の劉廷と一戰あし凡そ五年が其間日夜山野の起伏しに雨露霜雪に身をうたれ斯迄やつれ憔へし艱難辛苦も水の泡尾西如き臆病者に御數懇を加へられ滅忠盡す正清と憎み賜ふいわ情あしと恐れ乍ら我君をお恨み申して御座りまする

○淨瑠璃

「悲歎の涙ふくれ居たる

常「ホヽオ今に始めぬ正清殿の比類なき手柄の段々　早「尾西殿を町人と云へしも異國へ對し日本の暗い「誹謗あせしも實に尤も　ろ「我々感心皆々「致して御座る

○淨瑠璃

「大領御機嫌うるはしく

久「まつた盟臣と名乘しも申し譯相立上い一端の働氣免し五ケ年が間朝鮮にて苦戰あしたる恩賞に今日より改めて盟臣の姓をゆるしくれるぞ　正「スリヤ御働氣の御免の其上に抽者めふ盟臣の姓を下し賜とるとかヤエヽヽ有難ふ存じ奉つりまする　石「御連枝の外お免し無に何ゆえ有て正清に　久「ナヽ連枝に等しき緣者ゆえ　石「何に御緣者とい　久「ホヽオ不審ゆ尤とも正清が母、あるものい大政所の從姪故我ふい近き間だなり盟臣を讓るとも苦しからざる緣者の正清　常「斯る御緣の有事い唯今迄存せざりしが　早「何い格別正清殿にい御働氣御免の其上ふ盟臣の姓を賜はり　常「嘸大慶に　常、早、兩人「御座らふあ　正「仰せの如く今日

い何如ある吉日か身の浮雲も吹晴れて日本晴が致して御座る　久「唯今
揚氣をゆるせし上い和睦破れし朝鮮へ汝再び打手に向ひ我存念を晴し
くれよ

○浄瑠璃

「仰せよ正清勇み立

正「ハヽァ仰せにや及ぶ可き(乘地にあり)たとへ明朝百万の大軍なりとも
討亡ぼし毛唐人の耳を切り君のお土産に奉つらん

○浄瑠璃

「勇み立たる正清が詞の如く耳塚の古跡迄今よ遺し
ける

久「ホヽォー勇ましヽく○門出の酒盃申し付い　ひ「ハヽヽヽ(後に向ひ)

何れも御酒宴の御用意召れ　奥にて大勢「畏まりました　久「誰ぞ有る者致
せ　奥より淀君「ハァヽヽー(奥の襖を引抜ば金の烏帽子水干に太刀を附
けたる淀君に夥多の女中が雛子方今様振の男舞ひ久吉公い土器を取り
上一口呑はして正清へとさし、賜ふ)　久「コリヤ嗚物よて正清近ふ　正「ハ
ッ(ト久吉公の御前に進む久吉公い小姓の携ふ太刀とり賜ふ)　久「門出の
餞別(ト正清受頂き　正「ハヽ有難く頂戴仕りまする　石「エヽ返すく(も
(ト立かゝらんとすれば)　常「アヽコレ　常、早、兩人「御前で御座るぞ　石「ム
ヽー　久「直様出陣　正「ハヽッ(ト又も今様の雛子につれ立上りてゞ行の
いるゐ　久「コリヤくまてく　正「ハッ(ト平伏と共に雛子も止めたり)
久「頓て自出度歸國を待ぞよ
「ハヽッ(久吉公や常盤ゐ早田悦こぶ
中に石田光成口惜けれど詮方おし又も淀君今様の男舞こそ勇ましく正

消大刀を押頂き出陣用意に入りにける幕

（歌舞伎十八番内）

桃山譚終

明治十九年七月十七日版權願
仝年八月六日仝免許
仝年八月日出版　定價壹錢

編輯兼出版人　大分縣平民　龜井晴吉　上京區第廿五組龜屋町第廿一番戸寄留

出版人　京都府平民　內山龜太郎　下京區第拾九組植松町第四拾九番戸

同盟　東京　橘町四丁目第十一番地　鶴聲社
發兌　西京　寺町通松原南第四十九番戸　改進堂
書林・大坂　北濱四丁目第二十一番地　歌舞伎新報社

弘通大賣捌書林

東京日本橋通四　春陽堂
仝神田　團々社支店
仝銀座四　博聞本社
仝神田　誠之堂
仝　嚴々堂
仝小川町　集成社
仝横山町　辻岡屋
仝　野村銀次郎
仝本石町二　北田屋
仝[illegible]町　兎屋天駒
仝[illegible]田　柏悦堂

大坂心斎橋南　東京屋
仝順慶町四　兎屋支店
仝備後町四　岡島支店
仝大宝寺町　出版會社
仝本町四　和田庄藏
仝博勞町四　帶川堂
仝久太郎町四　柳原喜兵衛
仝本町四　赤志忠稚堂
仝　花井卯助
仝南本町三　大辻増五郎
仝本町四　辻本本店

大津京町　澤一二郎
名古屋本町　川瀨代助
仝　玉屋町　片野東四郎
大垣岐阜町　岡安慶助
伊勢四日市　伊藤善太郎
加賀小松京町　宇都宮源平
紀州和歌山　平井文助
播州姫路　山野長四郎
丹波亀岡　佐藤清進堂
藝州廣島　早速社
肥前長崎　安中與兵衛

右ノ外京都各書藉問屋並ニ新聞賣捌所ヘモ差出シ置候間御便宜御注文可被下候